

高校生になぜ心理学教育をするのか

— 大学と高校の心理学教育の目標のちがいがい —

仁 平 義 明¹・高 橋 美 保²

1 はじめに

日本で心理学をフォーマルに教える場は大学に限定されているわけではなく、高等学校でも心理学の教育が行われている。高等学校では、教科「公民」の科目「倫理」の中で心理学にかかわる内容が扱われているが、そのほかに高校生に学校設定科目などのかたちで心理学の授業を行う試みが浸透を始めている。しかし、その実状には、アメリカ心理学会 (American Psychological Association; APA) がハイスクール心理学の国内標準カリキュラムを確立しようとして1994年にタスクフォースを立ち上げた (APA, 2005) ときと同様な混乱がみられる。

APAは、1999年に最初のハイスクール心理学国内標準カリキュラム (The National Standards for High School Psychology Curricula) を作成し、2005年には改訂を行った。さらにAPAは、ハイスクールでの心理学教育の支援を、科学としての心理学の認識を促進するAPA新戦略プランの一つとして位置づけており、2009年には全米の高校生の31%が心理学の単位を取るまでになっている (Belar, 2010)。この割合は、日本の高校生が科目「倫理」を履修している割合 (普通科3年で37%、専門学科3年で9%) に匹敵する (中央教育審議会教育課程部会「第2回高等学校部会平成18年4月24日議事録」)。

¹白鷗大学教育学部

²早稲田大学大学院人間科学研究科

心理学は、日本の現行の高校教育制度上でも、既存の教科「公民」に属する「学校設定科目」あるいは「学校設定教科に関する科目」として開講可能である（文部科学省「高等学校学習指導要領」平成11年3月）。じっさいに、高等学校、とくに総合学科をもつ高校では「心理学入門」「心理学基礎」「やさしい心理学」等の名称で正規の科目として授業が行われるようになってきている。しかし、同じ「心理学入門」という名称が使われていても教育の目標も内容もばらばらで、実態は“同門異室”である。文部科学省が自由な学校設定教科・科目を認めるようになったとき、「心理学入門」という名称でまったく異なる内容が教えられることは想定していなかったろうと思われる。日本学術会議心理学・教育学委員会心理学教育プログラム検討分科会も、对外報告「学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて」（2008）の中で、中等教育での組織的な心理学教育の必要をうたっている。

高校の心理学教育の混乱の原因の一つは、高校生への心理学教育の目標はどのようなものか、大学生の心理学教育の目標とはどのような違いがあるかについて、必ずしも教育担当者間に明確な考え方が確立されていないことにある。

ここでは、(1) ハイスクール心理学の標準カリキュラムをはやくから確立してきたアメリカ心理学会では、高校生への心理学教育の目標をどう設定しているか、(2) わが国では高校生の心理学教育がどのような目標のもとにどのような内容で行われているか、(3) 高校生への心理学教育の目標は大学生への心理学教育の目標とどのような関係にあるのか、について考えていくこととする。

2 アメリカ心理学会による大学学部レベルの心理学教育の目標

アメリカ心理学会（APA）の大学と高校の心理学教育の目標を比較するために、まず、学部レベルの心理学教育の目標をみていく。

APAの教育問題委員会から付託を受けたタスクフォースは、2002年、『学部段階の心理学専攻の学習目標と達成結果：報告書』（Undergraduate Psychology Major Learning Goals and Outcomes: A Report）を提出した。

心理学の主な学習目標は、(1) 心理学の学習に固有な目標群と、(2) 本来、教養教育一般の目標であるが、とくに心理学の学習によってさらに発達する能力の形成にかかわる目標群という二つのカテゴリーから構成され、それぞれのカテゴリーには、表1のように5つずつの目標、合計で10の目標があげられている。

表2-1. 学部レベル心理学の学習目標（アメリカ心理学会、2002）

I 心理学という科学と応用にそった知識、スキル、および価値観

このカテゴリーは、心理学教育の特質となる活動を反映するものである。

目標1. 心理学の理論と内容

• 学生は、主要な概念、さまざまな理論的視点、実証的な知見、および歴史的な流れをよく知っている。

目標2. 心理学の研究方法

• 学生は、心理学における研究デザイン、データ分析、および結果の解釈等の基本的研究法を理解している。

目標3. 心理学における批判的思考のスキル

• 学生は、批判的思考、独創的な思考、懐疑的な検討、さらに可能なら、行動や心的なプロセスにかかわる問題を解決するための科学的なアプローチを尊重し、自分でもそれを使用する。

目標4. 心理学の応用

• 学生は、心理学の原理を理解し、個人的、社会的、組織上の問題に応用する。

目標5. 心理学における価値の尊重

• 学生は、エビデンスを重んじ、あいまいなうちは判断を保留し、倫理的にふるまい、心理学を支える他の専門領域の価値をも考慮する。

II 心理学においてさらに形成されるような、教養教育にそった知識、スキル、および価値観

このカテゴリーには、ふつう一般的な教育、教養教育の一部である活動が含まれる。この領域の学生の発達と達成のアセスメントは心理学のみにとどまらない広い範囲の専門領域がともに責任を負うが、心理学のコースワークはこれらの一般的な教育の目標とくに貢献が大きく、さらにその目標を拡大する。逆に、教養教育で形成されたスキルは心理学の専攻での学生の達成にも貢献しうる。

目標6. 情報リテラシーおよびテクノロジー・リテラシー

- 学生は、情報のコンピテンスとコンピュータや他のテクノロジーをさまざまな目的のために利用できる能力がある。

目標7. コミュニケーション・スキル

- 学生は、多様なフォーマットでうまくコミュニケーションを行える。

目標8. 社会文化的な多様性と国際性の認識

- 学生は、社会文化的なものや国際的なものの多様性が複雑であることを理解し、尊重する。

目標9. 個人的な内的発達

- 学生は自己と他者の行動と精神過程への洞察の発達を行い、セルフ・マネジメントと自己改善のための有効なストラテジーを用いることができる。

目標10. キャリア・プランニングとキャリア発達

- 学生は、専攻後には、自分が得た心理学の知識・スキル・価値観をさまざまな職業の中で具現化することについて現実的な考えを持つようになる。

これら10の目標それぞれについて、学生たちが学習の結果として何をできるようになったかという、達成された能力の詳細なリストが作成されている。

この2つのカテゴリーの目標の関係は、図1のように表現すると理解しやすい。

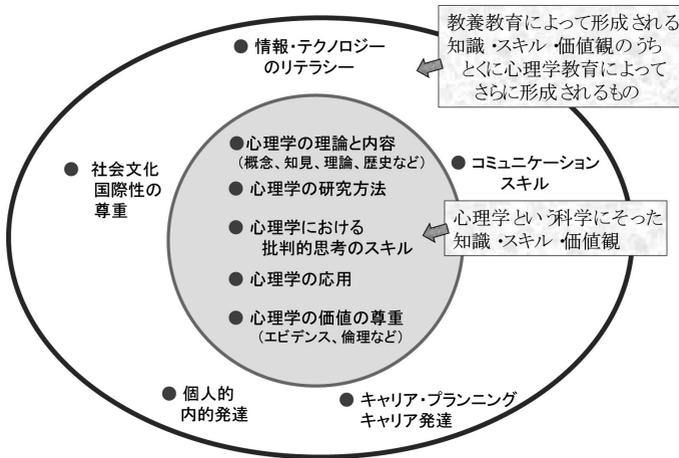


図 2-1. 学部レベル心理学の学習目標 (アメリカ心理学会、2002の考えを図にしたもの)

3 アメリカ心理学会によるハイスクール心理学教育の目標

アメリカ心理学会は、ハイスクールでの心理学教育のために、全国標準カリキュラム (National Standards for High School Psychology Curricula) を作成している (現在、2005年版)。作成WGのメンバーは、ハイスクールの教員が3人、大学の教員が1名で、カリキュラムの考え方にはハイスクール心理学の教育経験が反映されている。

3-1 標準カリキュラムの設定をめざした理由

そのまえがき「なぜハイスクールで心理学を学習するのか？」(Why Learn About Psychology in High School?) では、高校生が心理学を履修すべき社会的背景、心理学の学習の目標、ハイスクール心理学の標準カリキュラムを設定した理由が述べられている。

「科学としての心理学は、社会科学の諸科学とも自然科学の諸科学とも繋がりがあつる。アメリカのハイスクールの教科編成の性質上、心理学のコースは社

会科の教科としてもサイエンスの教科としても（あるいはその両方で）教えられる。そうした教科の割り振りは、カリキュラムにも影響を及ぼす。社会科のコースでは、歴史、パーソナリティ、社会心理学に重点が置かれることがある。サイエンスのコースでは、行動の生物学的基礎、感覚・知覚、及び学習に重点が置かれることが多い。しかし社会科あるいはサイエンスのカリキュラムでも、これまで心理学を適切に扱ってきたとはいえない。結果としてハイスクールの心理学のコースにこうしたバリエーションがあることが意味していたのは、中等教育で教えられている他のサイエンスの分野で期待されているものとは異なって、一つの専門領域としての心理学との最初の接触で、内容や要求のレベルに大幅に違いがある結果を生じることである。

心理学が、中等教育において他のサイエンスと同様に、一つの科学的な専門領域として学習されるのなら、心理学の各下位分野内で学習目標が設定されている必要がある。

これは、日本の高等学校で心理学が「学校設定科目」等として教えられるようになったときに起こっていることにほかならない。同じ「心理学入門」の名前でまったく異なる内容が教えられているからである

3-2 ハイスクール心理学の学習目標

心理学を学習する理由には、下記のように、人間が社会生活の中で直面するさまざまな「問題の理解と解決」という限定された理由があげられている。

「われわれの社会が直面している問題、重要な問題は、部分的には、人間の態度、価値、そして行動にかかわるものである。健康や安全、学習スキル、仕事の生産性、子どもや青年の発達、そして技術と情報の世界での人間の有効な働きなどは、そうした問題のごく一例である。犯罪や暴力、貧困や偏見、環境問題・消費者問題もまた人間の思考や行動に直接にかかわってくる。心理学という科学は、他の分野の諸科学とともに、こうした問題の理解と解決に貢献を

している。それゆえ、精神と行動についての科学として、心理学という専門分野への導入は、ハイスクールの生徒たちのカリキュラムの一部でなければならない。」

学習の目標についてAPAは、「思考、行動や個人差の要因の理解、科学的な方法の理解」、さらに「心理学の知識の現実生活への適用」を基本的なものとしてあげている。これらは、先に述べた、APAの大学レベルの心理学教育の目標でコアとなる、第Ⅰカテゴリーの「心理学の学習に固有な目標群」に相当する。

「科学的な心理学の学習を通して、生徒たちは人間の思考と行動の複雑さ、また人々との差異にかかわる諸要因について理解を得る。さらに、この専門の中核にある科学的な方法の基本的理解を生徒たちは得ることになる。生徒たちは、心理学の授業から得た知識を直接に自分たちの日常生活に適用することができる。」

また、次のパラグラフでは、「心理学は、社会科学とも自然科学ともつながりをもった、科学である」と書かれており、あくまでも心理学は科学であることが強調されている。

3-3 ハイスクール心理学のカリキュラム構成とサンプル・プラン

基準となる心理学教育のカリキュラムは、「5領域15ユニット」を基本とする構成になっている（図2）。図には、次のようなキャプションがつけられている；

「モデルで、中心に“方法”がおかれているのは、心理学という科学にふさわしい内容とスキルが教えられることの重要性を、このコースのコアとなる活動として強調するものである。」

これらのユニットを心理学の授業としてどう構成するかについて、見本になる計画も提示されている。

授業計画では、1年間のコースで全ユニットを含む標準カリキュラムを組むことが理想的であるが、1セメスターで授業を行わなければならない

場合もある。その場合は、5つの領域それぞれについてどのユニットを含めるか、判断が必要になる。たとえば、深い理解をねらいとするときには、1セメスターを5ユニットで構成することも考えられる。心理学という分野の多様性を生徒に認識させたいときには、10ないし15ユニット構成も考えられる。

プランの例では、5ユニット、10ユニット、15ユニット・コース、どの場合も、5領域のどれかを欠いた構成をすることはなく、5領域のすべてを含むようにユニットが選択されている。10ユニット・コースでは、次のような3つのプランが例示されている。

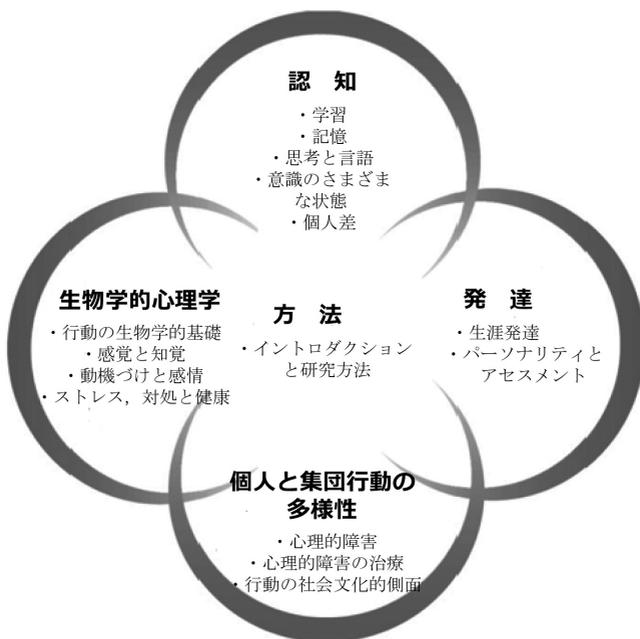


図3-1. ハイスクール心理学全国標準カリキュラム構成：5つの領域と15のユニット（アメリカ心理学会、2005）

〈プラン1〉の「ユニット」と（領域）

- ① 「イントロダクションと研究方法」(方法)
- ② 「行動の生物学的基礎」(生物学的心理学)
- ③ 「学習」(認知)
- ④ 「記憶」(認知)
- ⑤ 「生涯発達」(発達)
- ⑥ 「個人差」(認知)
- ⑦ 「動機づけと感情」(生物学的心理学)
- ⑧ 「感覚と知覚」(生物学的心理学)
- ⑨ 「心理的障害」(個人と集団行動の多様性)
- ⑩ 「心理的障害の治療」(個人と集団行動の多様性)

〈プラン2〉の「ユニット」と（領域）

- ① 「イントロダクションと研究方法」(方法)
- ② 「生涯発達」(発達)
- ③ 「行動の生物学的基礎」(生物学的心理学)
- ④ 「感覚と知覚」(生物学的心理学)
- ⑤ 「学習」(認知)
- ⑥ 「記憶」(認知)
- ⑦ 「パーソナリティとアセスメント」(発達)
- ⑧ 「個人差」(認知)
- ⑨ 「心理的障害」(個人と集団行動の多様性)
- ⑩ 「心理的障害の治療」(個人と集団行動の多様性)

〈プラン3〉の「ユニット」と（領域）

- ① 「イントロダクションと研究方法」(方法)
- ② 「行動の社会文化的側面」(個人と集団行動の多様性)
- ③ 「学習」(認知)
- ④ 「記憶」(認知)
- ⑤ 「行動の生物学的基礎」(生物学的心理学)

- ⑥「思考と言語」(認知)
- ⑦「意識のさまざまな状態」(認知)
- ⑧「生涯発達」(発達)
- ⑨「動機づけと感情」(生物学的心理学)
- ⑩「ストレス、対処と健康」(生物学的心理学)

3つのプランどの場合にも、「イントロダクションと研究方法」(領域；方法)からはじまり、「学習」(認知)、「記憶」(認知)、「行動の生物学的基礎」(生物学的心理学)、「生涯発達」(発達)が共通に含まれている(各プランのユニットで太字のもの)。APAは明確には述べていないが、これらのユニットをハイスクール心理学の“コア・カリキュラム”だと考えていることが推測される。しかし、どのプランでも、生徒は心理学の基本的な領域をカバーしたバランスのよい知識を得るようになっている。

さらに、ユニットごとに詳細な内容の詳細な基準と、その学習の結果、生徒たちが可能になったパフォーマンス(達成された能力)の詳細なリストも作成されている。

4 APAが考える大学レベルの心理学とハイスクール心理学

APAは大学とハイスクール・レベルの心理学に共通に、あくまでも心理学は“科学”であると強調をしている。“科学”的というのは、心理学が単純に自然科学的であるという意味ではない。それは、心理学は、つねに検証可能な仮説について適切な方法に基づいて妥当な結論を引き出そうとする仮説の修正機構(長谷川、2011)を持っていることである。ハイスクール心理学のカリキュラムでは「方法」が5つの領域の中心にあり、大学レベルの心理学教育の中核的なゴールに「心理学の研究方法」がおかれていることがそれを意味している。

もうひとつの共通点は、心理学の領域のうち特定のものだけに偏った扱

いをするのではなく、領域の全体をある程度バランスよく扱おうとすることである。ハイスクール心理学で、5ユニットのプランでも、10または15ユニットのプランでも、5つの基本領域のどれかが外されることはない。

大学レベルとハイスクール・レベルの心理学教育にみられる目標のちがいは、ハイスクール心理学では、大学レベルの心理学教育の目標群（I・II）のうち、心理学に固有の目標群 I が中心になっていることである。

5 日本の高校生への心理学教育：現状

現在、日本の高校生が公教育の中で心理学にかかわる内容の知識を得るのには、二つのルートがある。第一は、既存の教科・科目のうちで、実質的に心理学的な内容を学習するルートである。とくに、教科「公民」のうち科目「倫理」は最も多く心理学的内容を扱っている。ほかに、同じ「公民」の科目「現代社会」でも一部、心理学的な内容が扱われている。

もう一つが、「学校設定科目」あるいは「学校設定教科に関わる科目」として心理学を設定するルートである。

5-1 科目「倫理」の中の心理学

「高等学校学習指導要領」では「科目」の「内容」（教育目標）の大枠が定められているが、「倫理」では、内容の項目は、(1) 現代に生きる自己の課題、(2) 人間としての在り方生き方、(3) 現代と倫理、になっている。これが「倫理」の中で心理学的内容が教育されるとき目標である。すべてに心理学はかかわりうるが、とくに関連の深いものは、(1)「現代に生きる自己の課題」の内容である。

“自らの体験や悩みを振り返ることを通して、青年期の意義と課題を理解させ、豊かな自己形成に向けて、他者と共に生きる自己の生き方について考えさせるとともに、自己の生き方が現代の倫理的課題と結び付いていることをとらえさせる。”

この目標のもとで、心理学にかかわる項目が「倫理」の教科書の中で取

り上げられている。2009年度に使用されたすべての倫理の教科書8社12冊を分析した結果、心理学に関連する事項は全部で61項目あった（高橋・仁平、2010）。「内容」ごとの内訳をみると、(1)「青年期の課題と人間としての在り方生き方」が46項目と、大多数である。しかし、これまで日本学術会議心理学教育プログラム検討分科会の報告（仁平、2009；仁平・高橋、2009）や高橋・仁平（2010）において明らかにしてきたように、倫理教科書の中で扱われる心理学の記述には、致命的な問題点が存在する。教科書に共通して見出された問題のある記述は、①明らかに誤った記述・既に否定されている、あるいは捏造された事実（たとえば、「周辺人・境界人」という概念の提唱者名の誤り、「オオカミに育てられた少女」や「闕下広告の効果」などの捏造された事実）、②現代の心理学の常識からかけ離れた記述、③誤解を招く記述、に分類された。また、教科書の記述全体の傾向としては、現代の実証的な科学としての心理学ではなく、精神分析学派、力動的な心理学への偏りがみられた（高橋・仁平、同）。これは、現行の倫理の教科書の執筆や検定に心理学者がほとんど関係していないことが主な理由であると考えられる。教科書に少なからぬ誤りや問題な記述が見られることを考えると、日本の「倫理」教科書については、急ぎ根本的な再検討と修正が必要である。

5-2 「学校設定科目」あるいは「学校設定教科に関わる科目」としての心理学

平成11年3月告示の「高等学校学習指導要領」（文部科学省）では、学校裁量で既存の教科のもとに新たな「学校設定科目」を設けることが可能とされた。同要領では、“学校設定科目の名称、目標、内容、単位数等については、その科目の属する教科の目標に基づき、各学校の定めるところによるものとする”としている。この結果、教科「公民」中で学校設定科目として心理学入門などの科目が開設されるようになった。

また、既存の教科以外に「学校設定教科及び当該教科に関する科目」を設けることができるという規定もされて、新たな学校設定教科に関する科目としても「心理学」が開設可能になった。

心理学を「学校設定科目」あるいは「学校設定教科に関する科目」として開講している高校は増えている。しかし心理学は大学入試センター試験の科目でもなく大学の入学試験科目でもないため、いわゆる受験校をはじめ、たいていの高校では科目設定をしにくい。その中で、とくに、心理学教育の推進役となったのが、単位制による課程を原則とする総合学科を持つ高等学校である。

総合学科（文部科学省「高等学校学習指導要領」第1章第3款）では、“生徒が普通教育及び専門教育に関する多様な各教科・科目から主体的に選択履修できるようにする”ことが求められており、学校設定科目や学校設定教科に関する科目を設けることがむしろ望まれる位置にある。総合学科を持つ高等学校そのものも、総合学科が制度化された平成6年以来、増加しつづけ、平成22年5月現在、全国で338校を数えるようになった（文部各省「平成22年度学校基本調査」）。

5-3 学校設定による高校の「心理学」の現状:総合高校・総合学科の場合

心理学を学校設定科目あるいは学校設定教科に関する科目としている高校がどのくらいあるのかは、今後、組織的な全国調査が必要である。ここでは、部分的に知りえた範囲で学校設定による心理学教育の現状について分析を行う。

まず、関東1都6県の国立、公立の高校の総合学科または総合高校のHPから、心理学が関連すると思われる科目があるかどうかを調べた。

その結果、東京都（9校中7校）、神奈川県（13校中6校）、埼玉県（10校中2校）の1都2県の総合高校・学科で、心理学が科目として設定されていた（表5-1）。ただし、埼玉県に関しては、ほとんどの総合学科でHPではカリキュラムや設置科目名を公表していなかったため、他の高校で心理学関連の科目を設置している可能性がある。なお、筑波大学付属坂戸高校については、直接に電話での問い合わせを行った。

表5-1 高校総合学科の「心理学」科目の設定状況：神奈川県・埼玉県

県（高校名）		科目名
神奈川県	横浜市立横浜総合高校	「役に立つ心理学」
	横浜市立みなと総合高校	「心理学入門」「実用心理学」
	県立金沢総合高校	「カウンセリング入門」「心理学入門」
	県立麻生総合高校	「心理学研究」
	県立相模原総合高校	「心理学入門」
	県立大師高校	「心理学概論」
埼玉県	狭山緑陽高校	「やさしい心理学」
	筑波大付属坂戸高校	「心理学入門」*

*坂戸高校の「心理学入門」は、夏休に集中講義（1単位）として実施されている。

東京都の総合高校7校（表5-2）に対しては、メールまたは電話で連絡をとり、シラバス（年間授業計画）を入手するとともに担当教員の専門について聞き取りを行った（2011年2月現在）。

表5-2 東京都立総合高校（総合学科）の心理学関連科目

高校名	科目名（使用テキスト）	担当者
若葉総合高等学校	「心理入門a b c」（渋谷昌三『手に取るように心理学がわかる本』かんき出版） 「カウンセリング入門」（なし）	市民講師（臨床心理士）2名
世田谷総合高等学校	「心理学入門」（長谷川寿一他『はじめて出会う心理学』有斐閣）	市民講師（臨床心理士）2名
町田総合高等学校	「心理A」「心理B」（2011年度開始予定） ※2月11日現在、講師未定のため、シラバスや年間授業計画も詳細は未定。	未定
杉並総合高等学校	「心理学入門」（渋谷昌三『手に取るように心理学がわかる本』かんき出版）	市民講師（臨床心理士）1名
青梅総合高等学校	「心理学入門」（プリント）	高校教員（倫理）
晴海総合高等学校	「心理学基礎」（プリント）	高校教員（倫理）
東久留米総合高等学校	「心理学入門」（プリント）	市民講師（博士課程在学中の社会心理学者）

教科・科目は、たとえば、晴海総合高校や東久留米総合高校のように教科「公民」に属する学校設定科目「心理学基礎」「心理学入門」である場合もあり、世田谷総合高等学校のように「ホスピタリティ」という学校設定教科に関する科目「心理学入門」の場合もあった。

5-3-1 都立総合高校・学科の心理学：授業担当者

「公民」中の学校設定科目「心理学」で開講するとき、公民の免許状を持つ教員が心理学を専攻した場合は必ずしも多くはないと考えられる。そのため、たいていは教員免許状を有しない外部の「特別非常勤講師」（「教育職員免許法」第3条の2）が心理学を担当することになる（任用は都道府県教育委員会への「届出書」。「教育職員免許法施行細則」第65条の7）。東京都の場合は、「市民講師」（「東京都立学校市民講師設置要綱」平成3年3月15日）という名称が使用されている。市民講師が授業を担当する場合、「13時間を超えない」（同要綱）という制限があり、既存の科目「公民」担当の教員などとのチーム・ティーチングを行う体制がとられる。

表5-2のように、都立総合高校の心理学担当者の多くは市民講師である。2011年度から心理学を設置予定の町田総合高校を除いた6校のうち3校は担当者に臨床心理士が含まれており、2校は倫理の教員、残り1校のみ社会心理学が専門の心理学者が担当している。「臨床心理士」という資格は国資格ではないが、専門性を示す一つの資格と考えられ、このような結果になっていると思われる。たとえば、若葉総合高等学校では、市民講師の依頼に際して「臨床心理の学識を有し、カウンセリングの理論と実際を講義できるとともに、グループ・カウンセリングをファシリテイトできる方」という条件を挙げている。高校側が、心理学という科目にAPAのように科学としての心理学よりは臨床心理学的なものを求めていること、あるいは心理学イメージが臨床心理学に近いものになっていることが窺われる。

5-3-2 都立総合高校・学科の心理学：教育目標と内容

それぞれの高校の「心理学」の教育目標（学習目標、科目の目標、授業

のねらい、指導目標)は、表5-3のように異なっている。

青梅総合高校と晴海総合高校では、従来の教科「倫理」の中の心理学に比較的近い目標が掲げられている。その他の4校では、いずれも心理学の基礎的な知識の理解を踏まえるとしながらも、応用的な展開として自己や他者の理解、コミュニケーション能力の育成などが目指されている。

しかし、各高校のシラバス(年間指導計画)をみると、実際の授業内容は担当者の属性によって大きく左右される。

表5-3 東京都立総合高校の心理学の教育目標(年間授業計画より)

学校名「科目名」	目標(学習目標・科目の目標・授業のねらい・指導目標)
若葉総合高校 「心理入門abc」	①心理学研究や隣接分野への発展学習に備えて、その基礎・基本の定着を図る。②数学・生物などの基礎学力を生かし、心理学全般についての理解を促す。③居心地良いホームルームづくりや進路指導におけるコミュニケーション能力育成を目指す。
世田谷総合高校 「心理学入門」	心理学の基礎知識の習得を目標とする。理論的な学習にとどまらず、社会でどのように活用されているか、更に自己理解や他者理解にどのように生かすかについて、演習を交えながら体験的な理解を目指す。
杉並総合高校 「心理学入門」	①心理学の基礎的な内容に触れる。知識を学ぶ。②心理的知識を日常生活に応用、活用する方法を知る。③自分についての理解を深める。
青梅総合高校 「心理学入門」	青年期は、疾風怒濤の時代と言われるように感情の起伏や変化が激しい時期である。強い自我意識や劣等感と優越感との混乱と動揺の中で自己を構築し、アイデンティティを確立していかなければならない。青年期の精神的・心理的諸問題を取り上げながら、自分のことと向き合い、自分の生き方を考えさせたい。
晴海総合高校 「心理学基礎」	・科学的な方法手続きに基づいた心理学の学習を理解させる。 ・脳と心理のメカニズムについて考えさせる。 ・青年期を中心に発達課題を考えさせる。 ・性格の形成される主たる要因を理解させる。 ・欲求の動機とフラストレーションの解決を考えさせる。 ・フロイトとユングの深層心理のとらえ方から自我と無意識の関係構造を理解させる。
東久留米総合高校 「心理学入門」	①心について考えます。②「心理学」についての理解を深めます。③自分のこと・他人のことを知ります。④これからの進路・キャリアのことを考えます。(生徒配付用シラバスより)

若葉総合高校では、シラバスにある内容を具体的にみていくと、実際にはかなり臨床心理学領域に重きを置いたプログラムになっている。たとえば、授業の配当時間は、“臨床心理学”だけで20時間（“構成的グループエンカウンターと他のSGW”、“精神分析、行動分析などの理論とカウンセリングについて”など）、“発達心理学”が17時間、“心理アセスメント”が2時間を占めている。この高校の二人の特別非常勤講師（市民講師）は臨床心理士である。

青梅総合高校の「心理学入門」の授業は「序章・人間とは何か」（“孟子の性善説と荀子の性悪説”など）、「第1章・青年期の意義と課題」にはじまるが、「第4章・フロイトと精神分析」（18時間）、「第5章・ユングの心理学」（6時間）、「第6章・心理学の発展」（“アドラーの理論”“エリクソンの理論”“新フロイト派の理論”など）（6時間）と、合計30時間になる精神分析学の系譜の比重が大きい。これは「倫理」のほとんどの教科書での心理学にかかわる内容の扱いと同一傾向にある。担当者は「倫理」担当教員である。

このように、授業担当者により、同じ「心理学入門」は、著しく異なった内容になる。

5-4 学校設定による高校の「心理学」の現状：大学との連携の例

総合高校・総合学科以外に、心理学部・学科・コース等を持つ大学系列の私立高校や単位制の定時制を持つ高校で、大学との連携のもとに心理学関連科目を開設している3つの例をとりあげる。いずれも電話等による聞き取りを行った。

同志社国際中学校・高等学校（中高一貫）では、1998年から高校3年次向けに「心理学」を前期と後期に開講（2単位）している。授業担当者は同志社大学心理学部から派遣される支援体制がとられている。授業の内容は、1学期には、「実験1（記憶）」、「自分を知る（性格検査等）」、「トピックス1（恋愛の心理学）」、2学期は、「実験2（知覚現象）」、「実験3（空

間行動)」、「自分を知る2」及び「自分を知る3 (性格検査等)」、3学期は「トピックス3 (生徒が知りたいと思うテーマから選択)」の構成になっている。

その「科目のねらい(目標)」は次のように記載されている。

心理学は占いのようなものではなく、実験、調査、臨床などを通じて蓄積されたデータの上に成り立つ学問である。授業では、実験等を通じて人間全体の行動、思考、感情などの法則性を自然科学的な方法を使って見出し、個人に焦点を当ててその中から人間の心を探っていくことを目的とする。このような二つの観点を知ってもらい、心理学への理解を深めてもらいたい。

早稲田大学本庄高校学校では、早稲田大学人間科学部の「心理学入門」を収録した映像をほぼそのまま用いて、3年生の選択科目として大学の講義と同じく15回の授業を行っている。内容には、歴史、研究法、知覚、学習、認知、発達、性格、健康、臨床などが含まれる。大学での講義担当教員によれば、高校生向けに教育目標やシラバスは求められていないとのことであるため、ここでは大学の「心理学入門」のシラバスから授業の「目標」を引用する。

心理学が関連する領域は広い。本講義は、心理学の一般的方法と基礎知識の獲得のための入門である。人間は、どのように環境や対象をとらえ、どのように行動するのかを考える。

以上のように、大学が連携している2校の授業内容は、心理学の比較的基本的な領域をカバーしたものになっている。

これに対して、茨城県立結城第二高等学校(2010年度から、卒業年数や時間帯、科目等を選択できる“結城フレックススクール”として改組)は、「心理学Ⅰ」を必修科目(1単位:通年の45分授業;第1学年)に、「心理学Ⅱ」(第2学年)を選択科目に設定し、近隣大学の臨床心理学を専門とする教育学部教員のアドバイスにより授業を行っていた。心理学Ⅰの講義担当は、専門教科は英語の教諭(日本教育心理学会会員、日本教育カウンセラー協会認定上級教育カウンセラー)で、アドバイザーの大学教員が作成

した冊子をテキストにしている。心理学Ⅱの講義担当は、その大学教員である。高校への電話問い合わせと担当者自身によるウェブサイト（グループアプローチ研究会）資料（http://icertsvr1.edu.ibaraki.ac.jp/rinsho/?page_id=21）によれば、「心理学Ⅱ」の内容は、「インプロ」（即興演劇）、「構成的エンカウンター・グループ」、「グループワーク・トレーニング」から構成されている。

結城第二高等学校では、心理学教育は“ゆたかな人間関係づくり「心理学」”という大目標のもとに、次の3つの教育目標（“ねらい”）が設定されている。

- ①自己理解、他者理解を通して、ゆたかな人間関係をつくる。
- ②自己発見を通して、キャリアについて考える。
- ③心理学についての理解を深めることで、将来カウンセリング・教育・医療・福祉等で働く基礎となる対人関係スキルを学ぶ。

これら三つの高等学校の間で、「心理学（入門）」の教育目標も内容も三者三様であり、連携対象の大学の教員の専門領域と考え方に大きく左右されていることを示している。

6 日本の高校生に対する心理学教育をどうするか

6-1 高校生の心理学教育：いくつかの典型

実情をみてくると、日本の高校生に対する心理学教育は、APAがハイスクール心理学の標準を策定しようとしたときの状況よりも問題が大きい。

高校生に心理学を教えようとするときに、担当者が持つ素朴な発想の一つは、興味を持ちそうなテーマ、あるいは身近な・自分の問題解決に役立てられる内容について、わかりやすく教えるという目標であるかもしれない。大学に進学したとき、心理学をさらに学ぶために心理学全体について俯瞰図を与え、心理学をさらに広く深く学習したいというモチベーションを喚起するという考え方もあるかもしれない。

現在、「心理学（入門・概論・基礎）」の名称で行われている教育にはいくつかの典型がみられる。①大学の「心理学入門」そのもの、②一部は心理学の基礎的分野を扱い、他は高校生が興味を持ちそうだと担当者が考えるテーマ（たとえば、恋愛の心理、性格検査）を組み合わせたもの、③現行の「倫理」の教科書で扱われている心理学にかかわる内容に近いもの（精神分析学派に偏った内容）、④グループ・アプローチなど臨床心理学関連領域のうちのごく一部を取り上げたもの、などである。

学校設定教科・科目の精神は、学校独自の自由な“特色ある教育課程の編成”（「高等学校学習指導要領」）を可能にすることにあるが、それが学校ごとにまったく異なる内容の「心理学入門」の教育につながる結果になっている。高校生への心理学教育の標準をどのように考えるべきかについて心理学界をあげて急ぎ検討が必要になるだろう。

6-2 高校での心理学教育は、何を指すべきか

APAのハイスクール心理学標準カリキュラムが目指しているのは、学部レベルの心理学教育の目標群の二つのカテゴリーのうち、心理学という科学にそった知識・スキル・価値観にかかわる目標の「心理学の研究方法」「心理学の理論と内容」「心理学の応用」などに相当するものだった。

日本の高校生に対する心理学教育では、むしろ図2-1のうちの周辺的な目標である「キャリア・プランニング」や「コミュニケーション・スキル」を主な目標にすえている場合がある。

APAのハイスクール心理学の標準は、まず何よりも「科学としての心理学」を強調している。

英国心理学会（The British Psychological Society; BPS）も、“14～19歳への心理学教育に関する英国心理学会の考え方”（The British Psychological Society's Position on Psychology Education for 14-19 Year Olds, 2007）の中で、“心理学は科学のコミュニティにしっかりと根ざした科学的な専門領域である”としている。

心理学は、「倫理」の教育もそうであるように、人間としての自己と他者の理解を扱っている。ただ、大きく違うのは、心理学はそうした人間につい

て所与の考え方をそのまま教え込むのではなく、なぜそういえるのかを確認する研究方法をも教えることである。心理学には人間についての仮説をつねに証拠に基づいて修正し続ける機構が組み込まれていることを知り、必要なら自分もその方法を使用できるようになることを第一義的な教育目標にしていることである。これが“科学”としての心理学の意味である。このことを教えるのが、高校生への心理学教育の国際スタンダードだと言ってよいだろう。

最後に付け加えておきたい。心理学は、学生たちが人間の本性をどう考えるかにも影響を与え、影響度は心理学に初めてふれる段階ほど大きい(仁平、2001)。心理学教育の中でどのようなトピックスをどのように扱うかは、高校生の人間観の形成を左右することになるだろう。高校生たちが、与えられただけの人間観ではなく、つねにエビデンスに基づいた人間観を持とうとする態度を形成するのも心理学の目標である。

現在の日本において、学校設定科目の、目的も内容も学校が自由に定めることができるという利点は、諸刃の剣として、“同門異室”の心理学入門になる結果を導いている。こうした現在の高校での心理学教育の混乱状態を解決するには、心理学がなぜ高校教育で必要なのかについて、あらためて共通理解を確立すること、さらには、心理学を高校の学校設定科目ではなく、むしろ公民などの教科の中の「心理学」という科目として位置づけることであると考えられる。

そのようにして、広く日本の高校生一般に、“科学的”に人間としての自己を見ることができるよう、心理学教育を行うべきだろう。

文献

- American Psychological Association (2005) *The National Standards for High School Psychology Curricula*. American Psychological Association.
- Belar, C. (2010) Supporting psychology at the high school level. *Monitor on Psychology*.41, 63.
- 長谷川眞理子 (2011) 進化的人間考 6. ヒトにはどんな性差があるのか? UP, 2月号, 46-50.
- 文部科学省 「高等学校学習指導要領」平成11年3月
- 文部科学省 「高等学校学習指導要領」平成21年3月
- 高橋美保・仁平義明 (2010) 心理学は高校「倫理」教科書でどのように扱われているか. 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1169.
- 仁平義明 (2001) 心理学の講義は新入生の間観を変えてしまうか?—心理学の教師が注意すべきこと—. 平成12年度東北大学学生相談所紀要第27号, 25-30.
- 仁平義明 (2009) 高等学校教育における心理学: 現状と課題 (1). 日本学術会議 心理学・教育学委員会「心理学教育プログラム検討分科会」報告資料, 2009.9.7.
- 仁平義明・高橋美保 (2009) 高等学校教育における心理学: 現状と課題 (2) —「倫理」教科書での心理学に関わる内容の取り扱い—. 日本学術会議心理学・教育学委員会「心理学教育プログラム検討分科会」報告資料, 2009.12.7.
- 日本学術会議心理学教育プログラム検討分科会 (2008) 対外報告「学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて」日本学術会議
- The Task Force on Undergraduate Psychology Major Competencies. American Psychological Association. (2002) *Undergraduate Psychology Major Learning Goals and Outcomes: A Report*. American Psychological Association.

謝辞

本稿をまとめるにあたっては、日本学術会議心理学教育プログラム検討分科会の先生方、とくに委員長の利島保先生、長谷川寿一・内田伸子・無藤隆の各先生からの、国内外の心理学教育に関する情報によるところが大きい。